E-ASIA
university of oregon libraries
http://e-asia.uoregon.edu

瘠我慢の説

序

石河幹明

底本：「明治十年丁丑公論・瘠我慢の説」講談社学術文庫、講談社
1985（昭和 60）年 3 月 10 日第 1 刷発行
1998（平成 10）年 2 月 20 日第 10 刷発行。

瘠我慢の説

序

石河幹明

瘠我慢の説は、福沢先生が明治二十四年の冬頃に執筆せられ、これを
勝安芳、榎本武揚の二氏に寄せてその意見を徴められしものなり。先
生の本旨は、右二氏の進退に関し多年来心に釈然たらざるものを記し
て輿論に質すため、時節を見計らい世に公にするの考なりしも、爾来
今日に至るまで深く筐底に秘して人に示さざりしに、世間には往々これを伝う
るものありと見え、現に客冬刊行の或る雑誌にも掲載したるよし
（栗本鋤雲翁は自から旧幕の遺臣を以て居り、終始その節を変ぜざりし
人にして、福沢先生と相識れり。つねに勝氏の行為に不平を懐き、先生と会談の
語次、ほとんどその事に及ばざることなかりしという。この篇の稿成るや、先生一本を
写し、これを懐にして翁を本所の宅に訪いしに、翁は老病の余、視力も
衰え物を視るにすこぶる困難の様子なりしかば、先生はかくかくの趣意にて一篇

の文を草(そう)したるが、当分は世に公(おおやけ)にせざる考にて人に示さず、これを示すはただ貴君と木村芥舟(きむらかいしゅう)翁とのみとて、その大意を語られしに、翁は非常に喜び、善(よ)くも書かれたり、ゆるゆる熟読(じゅくどく)したきにつき暫時拝借(ざんじはいしゃく)を請うとありければ、その稿本(こうほん)を翁の許(もと)に留(とど)めて帰られしという。木村氏といい栗本氏といい、固(もと)よりこれを他人に示すがごとき人に非ず。而(しこう)して先生は二人の外何人(ほかなんびと)にも示さざれば決して他に漏(も)るるはずなきに、往々これを伝写(でんしゃ)して本論は栗本氏等の間に伝えられたるものなりなどの説あるを見れば、或は翁の死後に至りその家より出でたるものにてもあらんか）。

依(より)て思うに、この論文はあえて世人に示すを憚(はば)かるべきものにあらず、殊(こと)にすでに世間に伝わりて転々伝写(てんてんでんしゃ)の間には多少字句の誤(あやまり)なきを期せざれば寧(むし)ろその本文を公にするに若(し)かざるべしとて、これを先生に乞(こ)うて時事新報の紙上に掲載(けいさい)することとなし、なお先生がこの文を勝、榎本二氏に与えたる後、明治二十五年の二月、更(さ)らに二氏の答書を促(うなが)したる手簡(しゅかん)ならびに二氏のこれに答えたる返書を後に附記して、読者の参考に供す。

明治三十四年一月一日

石河幹明　記(しるす)

やせがまん　せつ
瘠我慢の説は、福沢先生が明治二十四年の冬頃に執筆せられ、これを

かつやすよし　えのもとたけあき　もと
勝安芳、榎本武揚の二氏に寄せてその意見を徴められしものなり。先

ほんし　しんたい　たねんらい　しゃくぜん
生の本旨は、右二氏の進退に関し多年来心に釈然たらざるものを記し

よろん　ただ　じせつ　みはか　おおやけ　じらい
て輿論に質すため、時節を見計らい世に公にするの考なりしも、爾来

きょうてい　ひ　おうおう
今日に至るまで深く筐底に秘して人に示さざりしに、世間には往々これを伝う

かくとう　けいさい
るものありと見え、現に客冬刊行の或る雑誌にも掲載したるよし

くりもとじょうん　みず　いしん　お　しゅうし
（栗本鋤雲翁は自から旧幕の遺臣を以て居り、終始その節を変ぜざりし

あいし　こうい　いだ
人にして、福沢先生と相識れり。つねに勝氏の行為に不平を懐き、先生と会談の

ごじ　な
語次、ほとんどその事に及ばざることなかりしという。この篇の稿成るや、先生一本を

ふところ　ほんじょ　おとな　よ
写し、これを懐にして翁を本所の宅に訪いしに、翁は老病の余、視力も

おとろ　み　しゅい
衰え物を視るにすこぶる困難の様子なりしかば、先生はかくかくの趣意にて一篇

そう　おおやけ
の文を草したるが、当分は世に公にせざる考にて人に示さず、これを示すは

きむらかいしゅう
ただ貴君と木村芥舟翁とのみとて、その大意を語られしに、翁は非常に喜び、

よ　じゅくどく　ざんじはいしゃく　こ
善くも書かれたり、ゆるゆる熟読したきにつき暫時拝借を請うとありければ、

こうほん　もと　とど　もと
その稿本を翁の許に留めて帰られしという。木村氏といい栗本氏といい、固よ

しこう　ほかなんびと
りこれを他人に示すがごとき人に非ず。而して先生は二人の外何人にも示さ

も　でんしゃ
ざれば決して他に漏るるはずなきに、往々これを伝写して本論は栗本氏等の間に

伝えられたるものなりなどの説あるを見れば、或は翁の死後に至りその家より出でた

るものにてもあらんか）。

依(より)て思うに、この論文はあえて世人に示すを憚(はば)かるべきものにあらず、殊(こと)にすでに世間に伝わりて転々伝写(てんてんでんしゃ)の間には多少字句の誤(あやまり)なきを期せざればむしろその本文を公にするに若(し)かざるべしとて、これを先生に乞(こ)うて時事新報の紙上に掲載(けいさい)することとなし、なお先生がこの文を勝、榎本二氏に与えたる後、明治二十五年の二月、更(さ)らに二氏の答書を促(うなが)したる手簡(しゅかん)ならびに二氏のこれに答えたる返書を後に附記して、読者の参考に供す。

明治三十四年一月一日

石河幹明　記(しるす)

底本：「明治十年丁丑公論・瘠我慢の説」講談社学術文庫、講談社
　　1985（昭和60）年3月10日第1刷発行
　　1998（平成10）年2月20日第10刷発行
底本の親本：「明治十年丁丑公論・瘠我慢の説」時事新報社
　　1901（明治34）年5月2日発行
初出：「明治十年丁丑公論・瘠我慢の説」時事新報社
　　1901（明治34）年5月2日発行
※副題の「序」は、このファイル作成時に付けたものです。
入力：kazuishi
校正：田中哲郎
2006年11月7日作成
青空文庫作成ファイル：
このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（http://www.aozora.gr.jp/）で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。